

山部会報告について

1. これまでの山部会の動き

第1回地域部会（H23. 1. 24 開催）

- 事務局が用意した矢作川流域圏の課題を踏まえ、今後検討したい課題を検討

意見交換WGなどによる議論

- 第1回地域部会結果をベースに市民有志が集まり、課題の再整理・検討（年5回）
- 「矢作川の恵みで生きる」を出発点に、山の課題を「人と地域の問題」「森の問題」の2つに絞り、市民提案
- 提案にあたっては、時代背景や未来像、課題解決手法も提示

第2回地域部会（H24. 2. 23 開催）

- 山の課題として、「人と地域の問題」「森の問題」の2つに絞り、前者は「山村再生担い手づくり事例集」、後者は「矢作川流域圏森づくり・木づかいガイドライン」等を策定することで合意

平成24年度より、提案を実行に移すための組織として「山部会WG」を組織化

2. 今年度の山部会WGの運営方針（2ページ以降参照）

- 市民、関係団体、学識者、行政の有志が参加（川、海部会メンバーも参加可）
- 1回/月ペースで流域内の地区を回りながら、各地区の山村再生の自発的・先進的な取り組みや森づくり・木づかいに関する現地見学、キーパーソンとの意見交換を実施
- 1巡目となる第1回（4/28）～第4回（7/7）までは、現地見学などを通じてそれぞれ地域の実情や取り組みの把握を行い、2巡目から「山村再生担い手づくり事例集」及び「矢作川流域圏森づくり・木づかいガイドライン」の具体的な検討を進めていく。
- 対象地区は、「根羽・平谷」「岡崎」「恵那」「豊田」の4つを設定

3. 今年度期待する成果

(1) これまでの取り組みで得られた成果（11ページ以降参照）

- 矢作川流域圏は、長野県、岐阜県、愛知県の3県にまたがっていることから、お互いの地域に関する情報がほとんど流れてこなかったが、山部会WGの開催によって、森林組合同士や、活動団体同士の情報の共有が始まっている。

(2) 今年度期待する成果

- 4つの地区に入り、現地見学やキーパーソンとの意見交換を通じて、情報の受発信ができる「場」や若者が交流できる「場」をつくる（今年度はWGを活用）。
- WGを通じた情報交換により、各地域が抱える課題を肌で感じることで、山村再生や森づくり、木材利用などの木づかいへの理解や意識を高める。

4. 運営方針説明資料

(1) 山部会WGの設置目的

矢作川流域圏懇談会では、矢作川流域の山・川・海地域の課題とその解決策について、市民部会、市民企画会議WGの主導により議論を行ってきました。山については市民部会の中の山部会において、議論が進められ矢作川流域の山の課題を「人と地域の問題」と「森の問題」の2点に絞り込み、前者については「山村再生担い手づくり事例集」、後者については「矢作川流域圏森づくり・木づかいガイドライン」を策定することを第2回地域部会山部会の場において提案し、合意が得られました。

この提案を実行に移すため、新たに地域部会山部会WGを組織し、月1回のペースで会議を開催し、各地区の山村再生の自発的・先進的な取り組みや、森づくり、木づかいに関するキーパーソンを含めた意見交換を行うことによって、事例集とガイドライン作りの具体的な作業を進めていくことを目的とします。

(2) 開催計画

- 第1回 4月（根羽）4月28日
- 第2回 5月（岡崎）5月19日
- 第3回 6月（恵那）6月16日
- 第4回 7月（豊田）7月7日
- 第5回 8月（根羽・平谷）8月24、25日
- 第6回 10月（岡崎）10月26、27日（調整中）
- 第7回 11月（恵那）11月16、17日（調整中）
- 第8回 12月（豊田）12月14、15日（調整中）
- 第9回 1月（根羽・平谷）

(3) 運営内容

- WGの進行については、地域部会座長・副座長が実施
- 1巡目となる第1回（4/28）～第4回（7/7）までは、現地見学（午前中）＋話し合い（午後）の概ね6時間
- 1巡目は、現地見学などを通じてそれぞれ地域の実情や取組みの把握を行い、2巡目から「山村再生担い手づくり事例集」及び「矢作川流域圏森づくり・木づかいガイドライン」の具体的な検討を進めていきます。
- 議題は概ね以下のとおり。
 - ☆ 「山村再生担い手づくり事例集」「矢作川流域圏森づくり・木づかいガイドライン」編集作業
 - ☆ 「山村再生担い手づくり事例集」に掲載する個人、団体、活動などの情報収集
 - ☆ 「矢作川流域圏森づくり・木づかいガイドライン」の策定に必要な情報の収集

(4) 山部会で検討する2つの課題（山部会提案）

今後、検討していく課題の詳細は次ページ以降に示すとおりです。

出発点「矢作川の恵みで生きる」の共有

検討の進め方

山村をとりまく
社会背景の変遷と
望ましい将来像

STEP1

過去と現在を 知る

理解と情報共有を
促進する

右に記載した事項について、具体的に「知る」機会を設け、情報共有を図る
→ 市民企画会議
→ 勉強会で対応

実現に向けた 課題と解決手法

STEP2

未来像実現に向けた 課題と解決手法を 考える

情報共有を踏まえ、まず「人の問題」をテーマに解決手法を検討

→ 市民会議
→ 地域部会で対応

STEP3

できることから 活動を 実践する

人と山村

森林

高度経済成長前から後へ

- 自給的経済、自立、自治、誇りがあった。
- 百業をやっていた。

現代

- 若者が中下流の都市へ流出した。
- 拡大造林によって広大な人工林が形成され、長期間管理し続ける必要があったが、その担い手がなくなった。

近未来
(放っておくとどうなるか)

- 限界集落、消滅する集落が増えていく。残された集落でも山村単独での自治や経済的な自立が困難となり、コミュニティが崩壊する。
- 国、県、市町村ごと、部局ごとに目指す森林の姿がバラバラで、流域圏一体となった森林管理が行われていない。

望ましい
未来像

- 流域圏にとって望ましい山村のあり方は、収入は多くなくても安定した若者の仕事があり、山村の資源を持続可能なやり方で利用しつつ、経済的に自立すること。
- 自然の恵みを利用できる知恵のある人が定住していること。

- 薪炭林施業が行われていた。
- 最上流域や額田地区ではスギ、ヒノキ人工林施業が行われていた。
- 藤岡・小原・旧豊田・岡崎にはハゲ山も多かった。

- もともと林業地だったところでも、そうでないところでも、もうかるというもくろみと国策により、拡大造林（広葉樹からヒノキ、スギへ転換）を推進した。
- 国産材を流通させる仕組みが輸入木材に比べて整わず、国産材の価格が低下し、林業が業として成り立たなくなった。

- もともと林業地でなかった地域では、多くの所有者が素人山主で林業を知らない。
- 管理が行き届かないため過密化した水消費型森林や放置人工林からの土砂流出・崩壊の危険性が増加している。

- 林業は利益を確保せざるを得ないことから、森林皆伐後の再生林の放棄が起こり、森林の水土保持機能が喪失する。
- 不適切な林道・作業道・搬出路が作られ、放置され、土砂が流出し、崩壊の危険性が高まる。

- 流域圏にとって望ましい森林は、自然の力で持続する生態系と人による持続的な維持管理下に置かれる生態系が最適に配置され、多様な生物が生息し、木材や水などの恵みを中下流にもたらしてくれる森林。
- 木材生産を主目的として管理する森林と、水土保持機能の発揮を主目的として管理する森林を区分し、木材生産に適さない人工林を天然林に戻していく。

実現のための課題と解決手法

森林の適切な管理は、まず山村の再生(担い手作り)から！

当面の課題1 誰がやるか(人と地域の問題)

課題

- 現金収入、仕事、医療、教育など、出発点到達する以前の問題が山積。

解決手法(例)

- 既に自発的に始まっている優れた取組を集めた「山村再生担い手づくり事例集」の策定を通じ、山村再生の担い手作りを支援する具体的な方策を検討する。
- 上下流をビジネスサイクルでつなぐ産業振興の推進（中下流都市中心部での上流生産物販売拠点の設置など）

役割分担

市民・学識経験者・行政が、対等な立場で、一体となって推進していく。

山村再生のために
先ず“人づくり”が必要
そのうえで“森づくり”にも
取り組む必要がある。

担い手づくり事例集イメージ

- 山村再生担い手づくり事例集
- 成功事例1
- 成功事例2
- 失敗事例1
-

当面の課題2 何をやるか(森の問題)

課題

- 流域圏として統一性のある森林管理を行い、矢作川の森の恵みが中下流や海までいきとどくためのガイドラインが必要。
- データ不足・研究の遅れによって、「植林こそが正しい」といった誤解を正すことが必要。

解決手法(例)

- 「矢作川流域圏の森づくり・木づかいガイドライン」の策定
- モデル林の設定とモニタリング
→ ガイドラインの検証のため、土砂を流す森、節水型森林の手本を作る。

役割分担

市民・学識経験者・行政が、対等な立場で、一体となってガイドラインを策定し、モデル林を設計、施業、研究し、モニタリングを行っていく。

行政・学識経験者・市民が対等な立場で、一体となって策定

【山部会提案補足資料】

当面の課題 1 誰がやるか（森の問題） 解決手法（例）について 補足説明資料

(1) 山村再生担い手づくりガイドブック

矢作川流域の中山間地では過疎化・高齢化が進み、多くの集落が存続の危機を迎えようとしている。一方で民間や行政による、IターンやUターンをめざす人のサポートや山村での生活の支援も多く実施され、徐々に効果を示し始めている。しかし中山間地の人口減少に歯止めをかけ、山村再生の担い手を増やし、上流域の森林を健全な状態にするためには、より多くの流域住民が異なった立場から幅広い支援を行うことが必要である。流域圏における多角的な山村再生の支援を実現するため、「山村再生担い手づくりガイドブック」の作成を提案する。

● どんなものか？

→ 矢作川流域の中山間地支援に関わる取組を網羅したガイドブック。紹介する取組の内容は農業・林業・林産業に従事する個人や団体、定住支援（住宅の提供、地域住民と定住希望者のコーディネートなど）や農林業・定住体験支援、流域の産物を販売する活動など。冊子もしくはインターネット上のデータベースとして公開する。

● 策定にどんな作業が必要か

→ 懇談会有志による仮称「山村再生担い手づくりガイドブック作成チーム」を立ち上げ、ガイドブックの様式を定め、手分けしてそれぞれの取組を実施している個人もしくは団体に聞き取りを行う。

● 策定により期待される成果

→ 矢作川中下流域の住民に上流域の山村再生とその担い手づくりの必要性を周知できるとともに、多様な形で参画・支援のきっかけを与える。具体的には中山間地の再生に関わる個人や団体と、こうした取組を支援したい個人や団体の活動をつなげられる。もしくはIターンやUターン、農林業体験に興味がある市民が体験の場を探せる。

→ 担い手・サポーターを増やすことでそれぞれの取組を強化・発展させるとともに、今後の人づくりを目標とした山村活性化に向けた具体的な取組（例えば上下流をビジネスサイクルでつなぐ産業振興の推進、中下流都市中心部での上流生産物販売拠点の設置など）とその担い手を提案していく。最終的には流域住民が主体となって山村再生の支援をすることで、持続可能な流域圏の実現をめざす。

（次ページ以降は中山間地支援に関わる取組事例。2011年2月27日に足助交流館において開催された「農山村へのシフト いま・みらい ― とよた都市農山村交流居住シンポ―」配付資料からの抜粋。山村住民、都市住民、NPO、企業、大学、若者、主婦などきわめて多様な主体による取組がある）

とよた都市農山村 交流ネットワーク

とよた都市農山村交流ネットワーク 設立

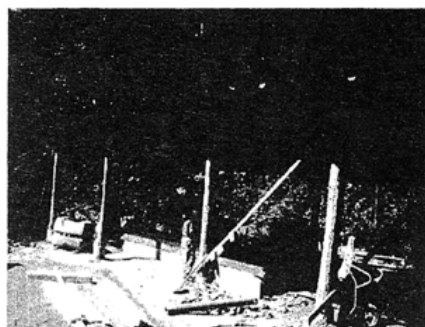


2008年12月10日結成総会。
80人が参加。
その中心になったのは志の高い「田舎」の人々。3年間、2泊3日小学校5年生の農山村体験を受け入れてきた小原・旭・稲武・足助・下山など農山村地域の有志の面々。自らが暮らす農山村をとっても愛し誇りとしています。だからこそ農山村の過疎化には心痛めている。

そんな有志の面々が、力を合わせよう、自分たちでやれることはやってみよう、動き出しました。都市と農山村の交流事業、農山村地域代表が集まって話し合った幹事会、農家力アップ連帯力アップめざした研修会、ホームページや通信による情報発信、都市部住民を農山村の仲間にする「山里学校」…ほぼどれもが毎月開催実施。豊田市農山村部地域を横断するネットワークの絆と信頼感は確実に高まっています。



NPO法人 千年持続学校



「25年ほどの間に、いなかでの暮らしに興味をいだく若者が増えてきました。でも実際にはなかなかいなかへの移住は実現していません。そこにはさまざまな「壁」があるからです。そこで私たちはこれらの「壁」を直接解決するような支援を行うために、「千年持続学校」を計画しています。この「学校」では「住まいづくり講座」と「なりわいづくり講座」を開催します。

① 住むところがない！

21世紀型（ゆい）と（つ）で住まい兼仕事場を作る。参加者で技術・労力を出し合い（結）、受講料（5万円×20人＝100万円）をプールして資材費にあて（講）、若い世代1世帯が暮らせる建物をつくる。

② 仕事がない！

半農多業の暮らしをめざして、自然農による自給的な農作を学ぶとともに、多業のネタとなる小さな技術・技能を学ぶ・学び合う。特に、自然療法の講座を開き、その技術・技能・思想をマスターする。

③ 医療機関がない、お金がかかる！

日常的な医療は自然療法で自給する。

④ 教育にお金がかかる！

これらの講座が、地域における「高等教育機関」となることをめざす。

「このような人の恵みと自然の恵みに囲まれた「エコでおしゃれなライフスタイル」を確立することで、若者が夢と希望を抱いて都市から中山間地に移住できるようなモデルをつくりたいと思います。まもなく実行委員会を立ちあげますので、みなさんのご参加をお待ちしています。

まちなか宣伝会議

豊田市中心市街地まちなか宣伝会議

まちなか宣伝会議は、豊田市中心市街地において事業を展開する商業施設・商店街・集客施設・行政関係者が、毎月1回意見交換・情報交換をするための任意会議体です。平成15年度から中心市街地の魅力発信事業として春と秋の年2回「とよたまちまちなかパワーフェスタ」を開催し、中心市街地の賑わい創出に取り組んでいます。

2011年の3月開催の「とよたまちまちなかパワーフェスタ2011スプリング」では、農山村の取り組みの紹介やグリーンマンの朝市出店者によるオーガニックマーケットやオーガニックマーケットや「おもちゃや絵本の交換会」「かえっこバザール」などを展開「eco」企画などを展開。



その他の豊田市中心市街地のイベントについて

●ふれ愛フェスタ(5月)：豊田市中心市街地の商店街主催の駅前通りが歩行者天国になる催し

●トヨタロックフェスティバル(10月)：豊田スタジアムで開催されるジョイカルウェイブ主催の無料野外音楽フェスティバルなど、様々な催しが開催されています。今後も環境や農山村の取り組みをまちなかで分かりやすく紹介できる機会を模索しています。

豊森実行委員会(豊森なりわい塾)



「豊森」とは、豊田市・トヨタ自動車株式会社・NPO法人地域の未来・志援センターの協働のもと行う森林を活用した「人づくり」「地域づくり」「仕組みづくり」のプロジェクトです。

多様な人材の参画によって、森を中心とした自然生態系の利用を軸とする地域循環型・持続型社会の仕組みが生まれ、暮らしの中で人と人の心結び直す「豊森モデル」を構築することを目指しています。

2009年5月から2010年12月まで豊森なりわい塾第一期が実施されました。一期生の中には、実際に山里に移り住んで、地域の針葉樹を活用した家具を製作する工房を立ち上げるなど、地域に根ざした事業を始める人や、農山村での新たな生き方を選択する人も現れました。

その一方で、森林の荒廃や農山村の過疎化だけではなく、「アイ」ターン希望者の住居の問題、また農山村と都市との交流の希薄さ等の現実的な地域課題に直面したことで、地域に寄り添って課題を解決していく情熱のある人材の育成や、その活動を支援するための仕組みづくりの重要性を再認識するに至りました。

ただいま、二期生を募集しています！
〔3月10日(木)必着〕
詳しくはチラシをご覧ください。

日本再発進！ 若者よ田舎をめざそうプロジェクト



皆様、日本再発進！若者よ田舎をめざそうプロジェクト、株式会社Measyの戸田友介と申します。地域の皆様にはいつも大変お世話になっております。ありがとうございます。

私たちは、2009年9月から「緑をいただき旧旭地区へ移り住んできました20〜30代の若者10人です。地域の皆さんに温かく迎えていただき無農薬・有機栽培の農業をして暮らしています。無農薬・有機栽培の農業を軸にしながら、地域にある課題を知り、解決する方法を定住する若者が地域と一体化しながら事業化することを目指しています。

「この冬は、味噌作りをはじめ、漬物、こんにゃく、凍み大根づくりなど、地域に根付く多くの文化を学ばせていただきました。本当にありがとうございます。古くて新しい絶品の食文化を自分たちの生活の中に取り入れていく中で、また大きな喜びを感じています。加えて、最近、地域の皆様に教えていただきました白菜キムチが名古屋のお客様に大変「好評をいただいています。これからもこの地域のよさを発進していくために、皆様のお宅に伝わる門外不出かもしれない秘伝の食文化を教えていただければ有難く思います。今年、米、大豆、野菜をテーマに300人のお客様に、私たちの大好きな旭の自然文化、そして、何よりも心温まるふれあいを感じてもらえる体験事業を開催する予定です。ふらっと立ち寄っていただければ幸いです。今後ともよろしく願っています。

*本プロジェクトは、豊田市、東京大学、株式会社Measyとの産官学共同プロジェクトです。

green maman

主な活動は、寺部町の守綱寺をお借りして開催しているgreen mamanの朝市（冬期以外毎月開催）。

主に豊田の農山村で真摯に農業と向き合っている農家さんに出店して頂いています。農家さん以外にも、地産地食、フェアトレード、手作り小物などが並び、幼児連れのお母さん達と生産者の方の交流の場にもなっています。

2007年6月に環境活動家 田中優氏の講演会の開催がgreen mamanの活動の始まりです。

メンバーの4人は乳児から小学生を持つ母。私たちは母として、「戦争のない、平和な社会であって欲しい」と願い、主に環境・平和・暮らし等の情報発信をしています。

朝市その他に、「暮らしの寺子屋塾」では、持続可能な社会をつくる為に、水問題、エネルギー問題、農と食の問題、自然農、自然療法のワークショップなどを開催してきました。また、冬期の「mamanの台所」では味噌仕込み、保存食作り、野菜や雑穀の料理教室などを開催し、毎回たくさん親子連れが参加してくださっています。今年も、いつかやってみたいと思っていた米作りにチャレンジする予定です。

ゆっくりではありますが、green mamanは、私たちと繋がるお母さんたちと共に、明るい未来が築ける様、一步一步進んでいけたらと思っています。

NPOによる山村社会実験 大成功

地元の実行委で継続決定

NPO法人都市と農村交差点
 ロイヤルセンターの主催で3
 5月に豊田市旭地区で実施された
 社会実験「木の駅プロジェクト」
 が大成功に終わり、6月6日に開
 かれた報告会で、今後も同地区で
 継続実施していくことが地元意

志で決まりました。今後は地元
 中心の実行委員会を立ち
 上げ、市行政も補助金を
 出す形に変わります。
 同プロジェクトの組織
 の特徴は3つ。1つは
 スキ・トキ人工林に放

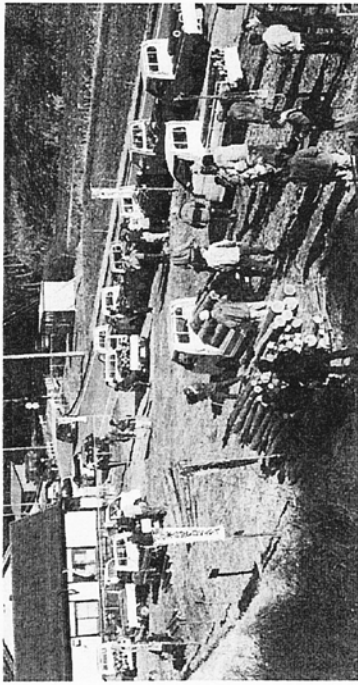
置られた伐り倒し材を、
 駆上りなどで活用し、
 からも高値で出荷できるよ
 うにしたい。山が腐
 爛になるまえ、山主の意
 識向上も期待できる。
 木材の買い取り価格は

1ト1160円。半分は
 製紙用子会社のよる
 買い取り価格。残半分
 はNPO等からの寄付金
 だ。5割以上の反響があ
 り、人が出た。集まった
 木は送料を省くため
 90トにもなった。目標

の地域産材「10割」が
 4割は達成された。地元
 の意識の高まりが感じ
 られた。アンケート調査の
 結果、木材出荷者も意欲
 商売への仕組の良さを
 実感。一方で、継続実
 施を望む意見は多かった。

人工林整備＋地域活性化

旭・木の駅プロジェクト



旭木の駅プロジェクトで集めるのは短材で良いので、個人が軽トラ
 ックで気軽に出荷できる。予想以上の反響があり24人が出荷。集ま
 った木材は寄付材をふくめ目標の2倍近い、90トンになった。

市旭支所が担当者設置 資金面の研究開始

れであり、旭地区の実
 施が全国にも例はない。
100%補助は駄目
地域自治が育たない
 本町支所にもたら
 しては資金面をまっけ
 ばならないが、これにつ
 いは市の補助金期待
 できると。市会長の
 塚本敏彦氏は社会実
 験と実践成果を出し
 てもらった。行政として
 れを生かさない手はな
 いと認めた。また支
 所内に担当者を設け、先
 に支所として旭早
 県豊田市の補助金例を

参考にしながら検討して
 いる。地域資源開発事業
 の活用が趣意に合いそう
 だという。
 なし、この仕組みを
 促進させるには、地元側
 が行政やNPOに頼り過
 ぎず、地域自治の意識を
 持つことが不可欠。
 全圃に木の駅プロジェ
 クトを定めていく方針調
 さは、報告会を行政
 からの補助金最大額
 で後援し検討する。
 100%出すと補助金申
 請になって地域自治が育
 ちませんと、うそを刺し
 ていた。【新見 浩】

(1) 矢作川流域圏の森づくり・木づかいガイドライン

矢作川流域圏の森林は3県にまたがる複数の市町村に位置しているため、中長期ビジョンと短期計画がばらばらに立てられており、流域圏で一体化していないことが課題。この課題を解決する手法として提案。

● どんなものか？

→ 矢作川流域圏の上流域の市民および中下流域の市民の今後1000年間の共存と共栄、安全の確保を究極の目的として、矢作川流域圏のすべての森に共通する中長期ビジョンと短期計画、望ましい森づくりと木づかいのあり方について定めるもの。16ページ程度の冊子を想定。

● 策定にどんな作業が必要か

→ 仮称「矢作川流域圏の森づくり・木づかいガイドライン策定委員会」を立ち上げ、1年間、12回程度の委員会を開催して策定。委員会は市民（上流、中下流）、学識者、市町村（上流、中下流）、県、国有林から、熱意のあるメンバーを募集し、事務局を豊橋河川事務所が務め、対等な立場で議論。

● 策定により期待される成果

→ 流域圏で一体化した森林管理の中長期ビジョンと短期計画、流域圏の望ましい森づくりと木づかいのあり方を明示することで、市町村、県、国、森林組合、森林所有者がこれまで以上に流域圏一体化を意識し、流域圏の望ましい森づくりと木づかいの実現に寄与していただくことを期待。

→ 中下流域の住民に「流域圏の森づくりのための木づかい」につながる消費行動を提案。

→ 中下流域の事業者「流域圏の森づくりのための木づかい」につながる社会貢献活動を提案。

→ 以上により、上流域の市民および中下流域の市民の今後1000年間の共存と共栄、安全の確保に向けた第一歩を踏み出す。

(2) モデル林の設定とモニタリング

「矢作川流域圏の森づくり・木づかいガイドライン」において、「土砂が流れる森、流れない森」「節水型森林、水消費型森林」「健康な作業道、不健康な作業道」などの区分をする必要が生じるが、区分の基準、指標について、科学的知見が不足しているため、順応的管理のためにモデル林を作り、モニタリングが必要。概念的説明だけでは市民から見てわかりにくいので、実物で示す必要。

● どんなものか？

→ 「土砂が流れる森、流れない森」「節水型森林、水消費型森林」「健康な作業道、不健康な作業道」などが一目見てわかるように整備した森林。

- 森から流れ出す水量、水質、土砂量などをモニタリングできるように観測機器等を整備した森林。
- 設置およびその後のモニタリングにどんな作業が必要か
 - 仮称「矢作川流域圏の森づくり・木づかいガイドライン策定委員会」の責任において、モデル林の設置場所を提供してくれる地主を見つけて了解を取り、具体的な作業は委員会メンバーで相談しつつ分担して森づくりをする。費用負担の分担も委員会で審議して決める。
- 策定により期待される成果
 - 実物を見ていただくことで「矢作川流域圏の森づくり・木づかいガイドライン」への市民の理解が容易になる。
 - 森づくりを協働作業で行うことで信頼関係が醸成される。
 - モニタリングにより、データが蓄積され、科学的知見が増え、順応的管理に資する。

5. これまでの取り組み状況報告

(1) 第1回山部会WG（根羽）：4月28日

- 林業立村をめざす根羽村の現状を現地見学した上で、山村再生に向けた意見交換を行い、森林組合から「山村再生担い手づくり」「森づくり指針」についての提案を頂いた。

【山村再生担い手づくり】に関わる提案

- ・ 林業に従事する者の人材育成経費支援（一人前になるには10年必要）
- ・ 林業従事者定住支援（住宅取得支援・体系的な支援）
- ・ 下流域の市町村住民等が上流域の木材を普通に使えるようなシステム構築（地域企業等の参加による木育から始まる家づくり）
- ・ 山村部の木育指導に関する経費支援
- ・ 市民参加できる簡易伐採出機の支援
- ・ 下流域の小学校の工作室等教育分野への木造公共施設普及、企業事務所、3階木造住宅提案
- ・ 農家民泊、田舎の親戚制度創設
- ・ 林業最前線からの林業教科書づくり
- ・ 魅力的な林業の職場を自らつくる



■モデル住宅



■桜の庭

【森づくり指針】に関わる提案

- ・ 茶臼山北面天然林に信大農学部への演習林設定（流域住民の樹木学実習）
- ・ 森林水文学の市民講座開設
- ・ 間伐指針の最終形（スギ400本/ha、ヒノキ600本/ha）から次世代に向けた山づくりの方向性
- ・ 市民が考えられる林学のお誘い
- ・ 再造林、複層林、広葉樹林、混交林、記念樹の森、作業道開設
- ・ 森づくりへの市民参加
- ・ 獣害対策からシカ肉の特産品化へ（信大農学部との連携）



■作業道

(2) 第2回山部会WG（岡崎）：5月19日

- 岡崎市の森づくりに関わる現状について、取り組み事例の紹介や現地見学をした上で、山村再生や今後の森づくりに関する意見交換を行った。
- 意見交換は、山の担い手をどのように確保していくかということを中心に話し合いが行われ、その中では、山に愛着を持ってもらうこと、そのためには山の作業が小遣いになること、人との付き合いが大切であることなどが条件として挙げられた。



■水環境創造プラン説明



■野生鳥獣解体施設



■優良林業施業地



■話し合い風景

(3) 第3回山部会WG（恵那）：6月16日

- 恵那市の森づくりに関わる現状について、現地見学をした上で、取り組み事例の紹介や山村再生や今後の森づくりに関する意見交換を行った。
- 森林組合と民間企業の立場から話題提供があり、森林組合・民間企業・地域の関わり方や本当の森づくり等を中心に話し合いが行われた。業界として林業が生き残り、広範囲の森林を健全に保つためには、オーダーメイドの計画づくりや、民間参入、森林組合と民間企業間に競争原理、森林技術者の技術交流などが必要であるとの意見が出された。



■ 松下薪材間伐作業現場



■ えなの森林づくり
間伐モデル林



■ 奥矢作木センター



■ 奥矢作レクリエーション
センター

(4) 第4回山部会WG（豊田）：7月7日

- 第4回地域部会WGでは、豊田市の森づくりの現状について、現地見学をした上で、森づくりや山村振興の取り組みを紹介した上で、各取り組みに対する意見交換を行った。
- 次のステップに向けて、木材の活用とか定住とかテーマを設定し、アイデア提案することや流域圏の若者（森林技術労働者など）が集まる場をつくるなどの提案が出された。



■ 間伐地
(北小田バス停付近)



■ 加塩地域の間伐地



■ あさひ製材協同組合



■ 板取の家